

鳳凰丸の建造④

― 鳳凰丸の見分（鳳凰丸を見た人々） ―

前回は、鳳凰丸の見分で「見られる側」であつた浦賀奉行所与力・同心たちについてみてきたが、今回は「見る側」である幕府役人たちについて見ていきたい。

安政二年（一八五五年）二月晦日から鳳凰丸が浦賀に帰る三月十三日までの期間、鳳凰丸には毎日のように幕府の役人たちが訪れていた。ざっと見ていくと、まず老中をはじめとする幕府重役の見分が二回あり、第一回目は、二月晦日に老中阿部正弘・久世広周・内藤信親の三名を筆頭に若年寄、御側衆、大目付、勘定奉行など三十名ほどが鳳凰丸の内外や帆走の様子、大砲打方や小筒調練を見分している。第二回目は、三月六日で老中牧野忠雅・内藤信親を筆頭に若年寄、御側衆、勘定奉行、目付、勘定吟味役など十数名だったが、このうちには老中の内藤信親など二度目の見分となった者もいた。その他の幕府の役人としては、大番頭や作事奉行、普請奉行をはじめ、日光奉行などの遠国奉行、表坊主や品川東禅寺の関係者、老中の家来など重役からその家来まで様々な肩書きの人々が鳳凰丸の見分に訪

れている。基本的に見分には事前に配布された印鑑を持参する必要があつたが、三月五日には砲術師範下曾根金三郎、大目付の筒井政憲とその嫡子、薩摩藩の家来二十人が印鑑を持たずに鳳凰丸を訪れているほか、浦賀奉行土岐朝昌が息子と親類縁者を内緒で見学させているなど例外も存在している。このようなわけで、「拝見」や「見置」として鳳凰丸の見学に訪れる人が大半であつたが、「見廻」のため徒目付・小人目付（諸々の監視・監察を職務とする役人）も来訪している。このように、鳳凰丸を見た人々には見学に訪れた者と職務のために訪れた者がいた。ところで鳳凰丸を訪れた人々の中には、以前に浦賀奉行を勤めた者もいた。まず三月六日に見分に訪れた大番頭の遠山景高「在任期間：天保一四年二月～一五年二月」と大久保忠豊「在任期間：天保一五年九月～弘化四年五月」の兩名。遠山は、天保十三年（一八四二年）に下田奉行所が再設置されたあと、浦賀奉行が一員制となつた時の奉行である。大久保は、弘化二年（一八四五年）の米捕鯨船マンハタン号来航をはじめとする弘化期の異国船来

航事件の対応にあたつた奉行である。彼は見分のあとで与力・同心に「茶菓子等」を差し入れている。そして三月十二日に見分に訪れている留守居の土岐頼旨「在任期間：天保一五年二月～弘化二年三月」。土岐は、遠山の後任でマンハタン号来航時に浦賀で漂流民を受け取ることを幕閣に意図した奉行である。この意見が功を奏したのか漂流民は浦賀で受け取られている。こちらも見分後に与力に餅菓子を、同心に金二百疋を下げ渡している。大久保も土岐も「昔のよしみ」でこうした贈り物をしたのだろう。更にもう一人、浦賀奉行所の元関係者で贈り物をした人物がいる。三月三日に「見廻」にきた徒目付の一人、畑藤三郎という人物である。彼は浦賀奉行所の元与力で、弘化二年（一八四五年）のマンハタン号来航時と翌年のビッドル来航時に褒美をもらっている。どのタイミングで徒目付となつたのかよくわからないが、彼は「見廻」として鳳凰丸に来たにもかかわらず小銃の調練を見学しており、その後で与力・同心たちに饅頭を贈っている。元上司・同僚の来訪を受けて与力・同心たちにとって期せずして旧交を温める機会となつたのかもしれない。最後に、将軍による上覧につ

いて触れておこう。江戸城本丸の庭から将軍が鳳凰丸の出船の様子を遠望されとのことと、老中阿部より三月十三日の「朝五ツ時前」（午前八時前）には出船するようという指示が極秘にあつた。その後にこの時間の指定は「四ツ時」（午前十時）に修正されている。しかし結局のところ、鳳凰丸が出船したのは「五ツ半時頃」（午前九時頃）、天候のためか指示された時間より早く出船している。将軍がこの時間に鳳凰丸を見ることができたかどうかは記録がなくわからないので「見たかもしれない」と言うに留まる。

（山本 慧）



品川沖で発見した鳳凰丸（個人蔵）

★参考文献

- 『新横須賀市史』資料編 近世Ⅱ
- 『浦賀奉行』西川 武臣著（有隣堂、2015年）
- 『横須賀開国史シリーズ5 幕末浦賀軍艦建造記』（横須賀市、2002年）

浦賀奉行所跡の発掘調査（その八）

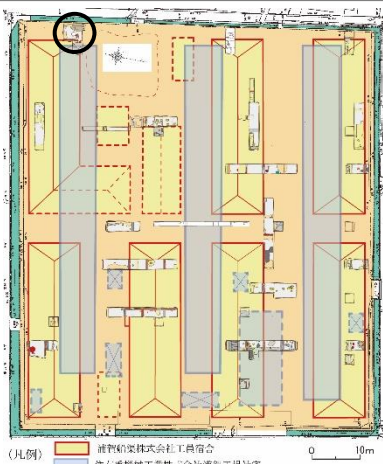
出土した昭和時代の陶磁器類ほか



今回は、昭和時代の浦賀ドック工員宿舎からの出土品について紹介します。

この時代のものとしては、統制陶器を主体とした多数の陶磁器類が出土しています。統制陶器とは昭和一六年（一九四一年）三月に示達された『陶磁器工業整備要綱』により定められた生産者別標示記号、通称「統制番号」が底裏に記された戦時統制経済下の陶磁器類です。敷地南西部で発見された土坑（図①）から、浦賀船渠株式会社

の英文頭文字UDCを組み合わせたロゴマークの入った工場食器（写真1～3）や笹の葉や櫛が描かれた文碗（写真4・5）色付きで描かれた蓋付井や皿（写真6・12）、その他の統制陶器がまとまって出土しています。また、



昭和時代の浦賀奉行所跡

海軍軍人や家族の診療を行っていた「横須賀海仁会病院」の「桜に錨と仁」の文字を組み合わせたロゴマークがある湯飲み茶碗（写真10）も出土しました。これらの陶磁器は岐阜県または愛

知県産で、底裏に染付・陰刻・陽刻等で「岐182」や「瀬207」などの統制番号が記されています。これらは、岐阜県陶磁器工業組合連合会や瀬戸陶器工業組合の略称です。

そのほかに時代背景を示すものとして、「浦賀船渠診療所」銘の薬瓶や「大日本麦酒株式会社」銘のガラス瓶等も出土しました。

平成三〇年、令和元年の二度にわたりに行われた調査の発掘面積は敷地の七〇程度で全容が判明したわけではありません。今年、これから実施される発掘調査で、貴重な歴史遺産である浦賀奉行所の説明が更に進むことが期待されます。

★参考資料

- ・「浦賀奉行所（役所）跡の試掘・確認調査」横須賀市教委2021
- ・「浦賀奉行所開設301年 浦賀奉行所跡」横須賀市教委2021



昭和時代の主な出土品である統制陶器類



図1 統制陶器等一括廃棄土坑（人工の穴）断面

Dock Café 8

終戦を迎えた浦賀の街や工場に大きな被害はなく、ほどなくして浦賀船渠は操業を再開するが、戦火を逃れた浦賀にも戦後の混乱は影を落とすこととなる。浦賀船渠は戦後賠償として接収されて造船機能が停止。そのため、鍋や農具などを製造して販売するも、物資不足も重なり厳しい時期を迎える。

時を同じくして、浦賀の港では戦地からの引揚げ事業が始まり、南方より多くの人々が陸軍機橋に降り立った。当時の様子を木造船技師で歌人だった橋本徳寿が日記に残している。浦賀に上陸した時の曇天の寒々しい港と街の景色、自身の引揚げ時の出来事やそれに関わる人々や浦賀の人たちの様子を詳細に記し、その思いを歌に残している。

甲板にみつむる船渠工場の
たかき煙突けむりをあげず
彼にとつて、栄華を誇った浦賀
ドックの煙突から煙が上がって
ない光景は悲しいものであった
だろう。こうして浦賀の戦後が始
まったのである。（江）

浦賀コミセン分館より

－フотスポットのご案内－



当館2階にある郷土資料室内の写真撮影は禁止です。来館記念に撮影される場合は、館内4ヶ所に設置されているフオトスポットをご活用下さい！

